

# 室生犀星未刊行作品にみる〈病児・亡児〉ものの意味

星野晃 一

## 1

室生犀星には、およそ百八十編（随筆・評論・俳句・短歌を除く）の未刊行作品がある。この中には、目に触れたい作品もあり、種々の問題を含む作品群でありながら、まだ十分な把握はなされていないといつてよからう。本稿では、特に初期未刊行作品中で病児・亡児を扱った作品を採り上げ、寸感を述べてみたい。いわゆる犀星の自伝的作品の一系列として〈病児・亡児〉ものを認め、そこにみられる犀星文学の特色について考えてみようと思うのである。その前に、犀星の未刊行作品一般について少し触れておきたい。

犀星には二つの全集がある。非凡閣版全集全十三巻別冊一卷（昭和十一年九月十五日）昭和十二年十月十五日）と新潮社版全集全十二巻別巻二（昭和三十九年三月二十五日）昭和四十三年一月三十日）である。これに準ずるものとして『室生犀星作品集』全十二巻（昭和三十

三年十一月二十五日）昭和三十五年五月三十一日、新潮社）がある。また、犀星には生前、および没年の八月までに出版された百六十冊余に及ぶ初刊行本、さらに後年新しく見いだされた未刊行作品を補充しつつ出版された『室生犀星童話集』全三巻（昭和五十三年七月七日）同年十二月二十五日、創林社）、『定本室生犀星全詩集』全三巻（昭和五十三年十一月二十日、冬樹社）、『室生犀星全王朝物語』全二巻（昭和五十七年五月二十日・同年六月二十日、作品社）など、主にジャンル別に編まれた十種ほどの刊行本<sup>注1</sup>がある。先に記した百八十編ほどの作品は、これらの全集・単行本等に収録されず、雑誌・新聞に発表されたまま埋もれていた作品ということである。

なぜこれだけの作品が未収録のまま放置されていたのか。原因は、時代また作品の質・量の関係など様々に考えられるが、これはここでは問題外である。いずれにしても、資料的には貴重な作品群であり、現在これらを集めて奥野健男・室生朝子・星野晃一の編により『室生犀星未刊行作品集』全七巻（第一～六巻は小説、第七巻は小品、戯

曲、童話、詩、および補遺作品)が刊行されつつある。この内、既に第一・二巻が刊行されている(第一巻・昭和六十一年十二月十五日、第二巻・昭和六十二年五月二十八日、ともに三弥井書店)。第一巻には、大正九年十月から大正十二年五月までに発表された二十編、第二巻には、大正十二年七月から大正十五年十二月までに発表された三十六編が収録されている。これらの中には様々な意味で注目されるべきものが多い。

例えば「すひかつら」である。「すひかつら」は、大正十二年一月から十一月にかけて『婦人之友』に連載された、自伝的小説の内の一つと考えられる長編である。自伝的にとらえると、この長編はこれまで欠けていた時間の空白部を埋める貴重なものである。

この作品には、東京郊外の百姓家の離れを借りて詩作する主人公春山と郷里の川島朝子との、出会いから結婚直前までが描かれている。といっても、二人の直接の交渉はほとんどなく、従兄弟の貞造を介しての間接的なものである。叙述の大部分は、東京生活の中で春山が経験する友人たちとの交わり、その中で男と女の問題、また、郷里での貞造との交友、養父の死、生母の思い出、そして処女詩集の刊行などに関するものである。これらが、あわただしく悩み多いはずの生活(詳しくは後述)の中で、「エキセントリックにおちいらず、正確に冷静にしかも抒情的に<sup>注2</sup>」表現されている。

犀星は、大正五年七月十日に東京市外田端百十三番地の沢田喜右衛門方に転宿している。

——略——東京の街を離れることを手はじめとし、郊外の田端に越すことにした。今の動坂から一二町ほど藍染川をのぼつたところに、百姓家のはなれがあつた。そこは、百姓家でありながら庭の植込みのあひだに四畳半二間つづきのはなれをそれぞれに建て、本家の二階も借してゐる大きな古い下宿屋であつたが、たいてい宿泊人は美術学生が多かつた。私の部屋は六畳で小さい玄関がつき、庭には柿の木と、白い芙蓉の一株があつた。——略——

(『泥雀の歌』)

この文章は、「すひかつら」の春山の居所や、下宿人、またかつての下宿人として登場する石田進歩たちに符合し(作中では離れのそばの木は椎の木)、この頃の実生活が舞台として用いられているのがわかる。

この年秋には、犀星はやがて結婚する浅川とみ子と文通を始めていたらしい。大正六年九月二十日、犀星は父真乗危篤の電報を受けて夜行で金沢に帰る。真乗は同月二十三日に逝去。同月二十七日には、かねて文通中のとみ子と会い婚約する。十月上旬帰京。大正七年一月一日、『愛の詩集』を感情詩社より自費出版。二月八日、結婚のために帰郷。これらはすべて作品の背景として使われている事実であり、「すひかつら」は、「春山はその翌々日郷里へ向つて出発した。」という一文で終っている。

つまり、自伝的作品として、実際との関係をいえば、この「すひかつら」は、大正五年七月前から大正七年二月八日までの生活を背景に

作られた作品だということになる。こう確認してみれば、「すひかつら」は、「幼年時代」「抒情詩時代」「性に眼覚める頃」「或る少女の死まで」の延長線上にある作品で、結婚前までを一連の作品群ととらえた場合は、その締めくくりの作品といえるのである。作者は、この意識で結末の一文を記したのであろう。「すひかつら」があつて初期の自伝的作品は完結するのである。これほどの重要な長編がこれまで注目されなかったのは、未刊行作品であつたゆえであらう。

この「すひかつら」は、先にも記したように大正十二年一月から同年十一月にかけて発表された作品であつた。この年犀星は三十四歳、実に多事多難な年であつた。八月二十七日に長女朝子の誕生、九月一日関東大震災、十月には母子を連れて金沢へ帰る。

ところで、この年はまた、長男豹太郎を失つた翌年にあたつていゝる。子を失つた悲しみと子を得た喜びと、精神的に振幅の激しい時であつたはずである。

このあわただしい生活と複雑な精神状態の中で、「すひかつら」は書き続けられていたのである。そして、最終回発表の十一月には、新しい自伝的小説の幕開けともいふべき、長女朝子を描いた「朝子」が『中央公論』に発表された。この新しい自伝的素材は、やがて遠く「杏つ子」まで書きつがれてゆくのである。

## 2

「心」は、大正十一年四月一日発行の『解放』に発表された未刊行作品であり、『室生犀星未刊行作品集』第一巻に初めて収録された短編である。そして、「心」は〈病児〉ものの第一作でもある。

おそらく触れる機会がなかった作品と思われるので、内容の紹介をしつつ、作品の意味を考えてみたい。作品は五章から成っており、作中の時間と場所の関係は次の通りである。

第一章 子供の発病の前日と当日 私の家

第二章 その翌日 私の家

第三章 後日の午後 大川端の涼亭

第四章 前章と同じ日の夜とその翌朝 私の家

第五章 二週間後、そして十七、八日目 私の家

時空の関係から、また後述する心理変化の関係からも、作品は大きく三つの部分に分けられる。つまり、第一・二章、第三・四章、第五章の三つである。作品における出来事と「私」の心は次のようなものである。

第一章。生後九か月の子供が暗い咳をする。子供の母親を除く「私」も「下婢のあき」も咳をする。その翌日、子供は発熱した。庭で仕事をする植木屋まで咳をしている。「私」は、何か陰気なものが家中に満ちているような気がしている。そんな時に、去年の秋からしつこく勧誘する生命保険会社の外交員が来る。「私」は命まで付けねらわれているような気がして入る気がしないが、相手は手土産を置いていく。開けてみると、それは「梅が香」という鳩居堂のお香であつた。

これが妙に気になり出す。医者は子供が肺炎になるかもしれないという。せいぜいせいぜいというのは喘息のせいだという。「私」は、風邪をひいているはずのあき、を子供から離そうとする。

じわじわと押し寄せてくる不安、親となって初めて経験する不安の心、これが、生命保険勧誘員の来訪と土産を不吉な予兆ととらえる叙述の中に、みごとに描出されている。まことに巧みな序章である。

ところで、「心」は志賀直哉の〈病児〉ものである。「流行感冒」(大正八年四月一日、『白樺』)に内容が似ている。しかし、両者はそれぞれの作家の資質を端的に示していて、そこには明らかな相違がみられる。この点に関しては後述するつもりである。また、「心」の第一章に登場する生命保険勧誘員は、同じく志賀直哉の「祖母の為に」(明治四十五年一月一日、『白樺』)における「六十ばかりの何処かで見たと事のある白つ児しろこの男」と同じ立場にある。「祖母の為に」は、祖母の病気とその快復の経過を描いて祖母への愛を綴った作品であり、この「白つ児」は、かつて祖父が亡くなった時、どこで聞き付けたのか驚くほどの早さで「私」の家にやってきた不思議な葬儀社の男である。「私」はこの「白つ児」に時々往来で会い、不吉な予兆を感じる。「祖母の命を狙つて居るように思い憎む。やがて祖母は病気になる。が、全快する。「白つ児」は死んでしまったらしい。その死を祖母のために喜ぶという、直哉らしいかなり強烈な個性を示した作品である。志賀直哉と室生犀星の文学にみられる共通性と相違性については、後で少し触れてみたい。

第二章。翌日から子供の熱は上がり苦しそうな呼吸をし始める。

「私」はそんな子供を見ていられず部屋に引き返す。引き返して子供の部屋の様子をうかがっている。子供の部屋には二個の吸入器がかけられていて、その音が、「私」の部屋からは初夏に鳴く白い蟬の声のように、しいい、しいいと聞こえる。この音が「私」を夢幻の世界へ導く。黒い髪を生やし、やせた顔色の悪い蟹のような白い目をした「私」そっくりの子が、近寄ろうとして畳を引っかいている。が、縄で縛られているために進まない。縄は隣の病室でつながれている。その「私」そっくりの子供の後ろには飴屋の子、米太郎がいる。小さい頃の友達であったが、二十年前、北海道へ行く途中船の中で死んだはずの子こである。その子が「お前と遊びたくてきたのだ」という。この不気味な夢の突然の挿入があつて、叙述はすぐ現実にもどる。「私」は隣の病室へ行く。子供の容体は悪い。「私」はまた部屋にもどつて眠る。子供は助かると思おうとする。一時間程して容体を聞くとうまくないという。「私」は子供の手を握つたり頭をなでたりする。もういくらも生きられない我が子だと思う。しかし、「私」はやたらと眠い。また床に入る。「おれほど完全なエゴイストはない」と思う。

親となつて経験する堪え難い苦しさ。繊細・過敏ゆえにその現実に接していられない「私」。精神に離反する生理。エゴイストの自覚。これらが、抑えた叙述の中に巧みに表現されている。

この章には、現実から異質の世界への急転という、犀星得意の表現法がみられる。叙述の接続具合はまさに急転である。また、そこに描

かれる夢幻の世界が理屈を拒否する象徴的なものであることも、大きな特色であろう。説明がない。それは、独立したイメージとして、詩のように読者の感覚の中に残り、それが自然な形で物語の世界に流れ込んでゆく。夢の挿入は志賀直哉も好む手法であり、先にあげた「祖母の為に」の中にもそれがある。しかし、その描き方、筋の中での位置・関係などが犀星とは大いに異なる、とだけ記しておく。

第三章。春先の大川端の涼亭の縁側で、「私」は襟の赤い、袖の長い女と五目並べをしている。碁盤の両隣に半玉が二人。「私」は「吉な乳白の石」をもち、女の黒石に追い詰められている。そのうち、「私のあたまはすっかり蜘蛛の巣だらけの、弾力のないもやもやした気もちに圧しあげられて」しまう。碁石を並べながら「私」の意識はそれに集中してはいない。そのうち、「私」は半玉らに薄笑いを催しながら「息を詰めて見ろ」と言い、一番長く詰めている者にいい物を遣ると言ったりする。執拗に「私」は白黒の石を並べる。そのたびに「私はべつの考へに領せられて」いく。それは子供の死の恐怖であろう。この第三章は、碁石を並べている現在を中心に、近い過去（病室の状況、容体の変らぬ子供、必死で看護する妻と下婢と二人の看護婦、それに対して相変らず眠りたがる「私」）、および遠い過去（どこかの磧で小石——碁石から連想された——をつまんで、殺した蛙の死体の上へどくだみの葉を覆い、葬いの唄をうたっていた、一人きりの寂しかった経験）が交錯する形で描かれる。この意識の交錯は、不安定な心を描くのには効果的であるといえよう。

不安・恐怖が、「私」を病室そして自室から遠く離れた涼亭に追いやる。しかし、そこで目にする白黒の碁石は暗い予兆として意識され、自嘲的に息を詰める遊びまでする。「私」は電燈がつく頃になつて帰途につく。おもちゃを五つ六つ買って。

第四章。家に帰る。病児は九度八分の熱で、相変らず苦しそうである。自室に入り、自分を悪い人間、エゴイストと思う。翌朝目を覚まし病室を見ると、病児を囲んで四人の女が疲れ切っている。「私」は春めいた外を見つつ、子供を失いたくないと切に思う。一方、「うへには物悲しさうに、実際よりも最つとそれを激しく表情して見せてゐる」人間だと、激しく自己否定する。

第五章。二週間後、子供に変化が見え始める。女らは憔悴してしまつた。「私」だけがくたびれず、健康であつて風邪もひかない。ただ肩が凝っている。「私」は自分の健康を喜ぶ。みんな倒れても自分が健康なら何でもできるという自信もある。その半面では、自分だけ疲れていないのが気がかりである。ずるい考えの見すかされるのは耐らない。そこで、やたらと肩の凝りを強調する。事実凝りはひどかつた。女らはそれをやはり子供の病気を心配する故という。「私」の肩の凝りは持病なのである。「私」は、自分の「むつかしい厭な心」を思う。作者は次のように書く。

私の心の奥なる心もちは、やはり変な物足りない、うそを吐いたあとのやうなハグレがちな気になつた。まんまと欺し終へただけなほ気味がわるく、寂しく気もちがゆるんで見えた。とにかくお

れほど我儘で自分勝手に、やくざな人間はないとも考へられた。

冷たい舌も出なかつた。眉毛を吹く風に逆立てられる眉毛の小寒く、ま寂しい気もちだつた。

十七日目、快復した病児を妻が抱く。「私」はまだ不安である。外から帰ると、案の定子供は四十度の熱を出している。しかし、翌朝には快復している。この夏は楽しみだと思ふが、また、看護しなかつたことが気になり出す。「子供の黒々した凝視」が「私のれいの猥い心を抉り出」そうとしているようで、「私」の心は相変らず晴れない。

この作品が、「おそらく長男豹太郎が風邪を引き、高熱を發し危かつた時の心配と幻想と反省から書かれたもの」であり、子供の「死の子兆におびえた怖ろしい作品」という奥野健男氏の指摘<sup>注4</sup>は確かなものである。大正十年五月六日に生まれた犀星の長男豹太郎は、「心」が發表された約三か月後の六月二十四日に満一歳で亡くなっている。この悲しみ、〈亡児〉の作品化については後述するが、「心」はその直前の、不安と喜びの交錯する中で描かれた〈病児〉に関する作品である。いふなれば、わが子の病いと死、つまり〈病児・亡児〉をテーマとした自伝的作品の最初のものといえる。

「心」は、子供の発病から全快までの約半月間に時間を設定し、親となることよつて初めて経験した心を凝縮する形で描出した作品であつた。この心は、一つの大きな発見であり驚きの対象であつた。特異な出生、放浪、結婚というこれまでの人生経験の中では、実感として味わうことの当然不可能なものであつた。

作者は子を失つてのち、『忘春詩集』（大正十一年十二月十日、京文社）の「序言」の中で次のように書く。

——略——自分の子供を亡くしたといふよく有り触れた境致に、さういふ人生の真実に何時の間にか触れたといふことに、私は始めて驚いたと言つてよいのである。人生といふものは辛酸の続きであるといふより、私にとつて人生は結極美事な驚きをその悲しみより先き立つて囁いたからである。人一倍さういふことに打たれる私には、一切の哀愁よりも先づ私といふ微些な一個の人間が始めてこの世のものに、さうして人生といふものを解りかけたからである。平淡で、その上すこしの波動のない私の暮しの中では、何ものにも増して私を驚かせたことは實際である。

また、「一帖の原稿紙」（大正十二年一月一日、『詩と音楽』）の中でも、子を失つた悲しみを綴つたあとで「——いたづらに私はずつとむかしの私を氣樂でまだ人生といふものを米塩にのみ心を砕いてゐて、それが人生といふものの最奥のものであるといふ考へをもつてゐたことを振返つてさもしく感じた」と書く。悲しい体験を驚きとしてとらえ、それによつて眞の人生に触れ得たという。

ところで、日頃病弱である上に、生後一年にも満たない第一子が危篤状態であつた、その時の作者の心はどうであつたらう。これについて述べた文章はないようだが、心の動揺の程度も種類も引用文に変わらないものであつたはずである。「心」はこれを形象化したものである。

子供が死ぬかもしれないという不安と恐怖。時間の中のやりきれ

ない苦しき、不安定に揺れる心。精神に離反する生理の自覚。エゴイストの自覚。自己否定。自嘲的、悪魔的な心。第四章まではこれらの心が中心に描かれるが、第五章では自分の「むつかしい厭な心」「私のれの猜い心」に執拗にこだわり続ける。いずれも悲しい体験の中に生じた心であり、作者にとっては新しい心理の発見であった。作者はこの心理を、やや未整理の感はあるが実験的に意欲的に執拗に追求している。そしてついに、「心」は、嫉妬を形象化した名作「香炉を盗む」と併称すべき作品になりえていると思うのである。

「心」に続く〈病児〉ものは「ピアノの町」(昭和七年二月一日、『新潮』)であるが、これも未刊行作品(『室生犀星未刊行作品集』第三巻に収録予定)である。赤痢による、おそらく昭和六年暮れの二男の入退院、そして、続いて翌年正月の、同じく赤痢による長女の入退院の経験を描いた短編である。作中に「八年前(実際には十年前―筆者注―)長男を亡くしてから今度が久しぶりの痛手だ」とあるように、「心」に直結する作品である。

作者はこの時満四十三歳、子供も長女が満八歳、二男が満六歳になっており、「心」の時の状況とは大いに異なる。作者は、十年前の不幸を思い起こし、不安な親心の微妙な姿を描くが、表現は円熟味を増し、構成もしっかりしている。が、なぜか両作品とも未収録のままであった。この作品も、〈病児〉もの、自伝的作品系列の中で、その位置を得てしかるべきであると思う。

作品は次の一文で終る。重態の域を脱して退院する娘とその両親が、ピアノのような自動車に乗って、正月のピアノのような町の中を帰ってゆくのである。

まるでピアノの町のやうで、僕はそのピアノの町のあいだに青い龍を描いた旗を樹てて見たらよく調和しやしないかと思うた。

「心」の最後が、「ねばねばした暗い考へ」から離れられない叙述ではあるが、ともかく全快の朝で終っていたように、「ピアノの町」も希望を示す明るい朝で終っている。これは祈りにも似た結末で、この構成法は『抒情小曲集』収録の際になされた「小景異情」のそれと同種であり、次<sup>注5</sup>にあげる「立春歌」も同様の姿を示している。

昭和六年五月号の『セルパン』に載っている「立春歌」と題した六首は、同年三月二十日の日記に記されたものとほぼ同じである<sup>注6</sup>。入院に至らない二児の病気と親の心配は日記の随所に散見されるが、この「立春歌」などもそのすなおな激しい感情の表現として、つまり、「心」や「ピアノの町」のモチーフを純粹な形で示したものとしてみてもよからう。

#### 立春歌

よもすがら咳のこゑ止まず、

くれなゐの

こどもの面わ、

咳のこゑ止まず。

こどもらみな病み  
つまも病めり。  
われひとり病まず、  
物を書くかな。

ひと日終り、  
あくびをしつつ  
小夜床に  
まなこ開きて  
ねむらざりけり。

つゐにわれ酒をひかえぬ、  
家ぢうの  
病めるを見ては  
酒を食うべず。

こどもらみな死ね、  
或夜のわれ  
暗き巷を往反り  
何か抛打つ。

まくらべに花をならべて、

こどもらに

見よとは言ひつ、

春になるかな。

「或る家の花」は大正十二年四月一日発行の『太陽』に総題「鏤心」の「三」として発表されたもので、これも『室生犀星未刊行作品集』第一巻に収録された作品である。〈病児〉ものであり、また〈亡児〉ものでもあるあるこの作品について述べる前に、ここで犀星の〈病児〉〈亡児〉ものの全体をまとめておこう。未刊行の主要作品を中心に、また、参考作品（一）で示す）をもあげておく。

○「心」（大11・4・1、『解放』） 〈病児〉 未刊行作品

○「童子」（大11・10・1、『中央公論』） 〈病児〉〈亡児〉 『万花

鏡』（大12・1・、文京社）及び『新選室生犀星集』（昭4

・7・8、改造社）に収録

○「詩集『忘春詩集』（大11・12・10、京文社）のうちの「我が家の花」十三編 〈亡児〉

○「冬近く」（大11・12・10）大12・1・14、『週刊朝日』に六回連載） 広い意味で〈亡児〉 未刊行作品

○「後の日の童子」（大12・2・1、『女性』） 〈亡児〉 『新選室生犀星集』に収録

○「或る家の花」（大12・4・1、『太陽』） 〈病児〉〈亡児〉 未

刊行作品

○「童話」(大13・12・1、『世紀』) 〈亡児〉 未刊行作品

○〔随筆集(付、短歌)〕『犀星随筆』(昭7・9・1、春陽堂書店)

のうちの「立春歌」六首 〈病児〉

○「ピアノの町」(昭7・2・1、『新潮』) 〈病児〉 未刊行作品

ほとんどが未刊行作品である。収録作品はわずかに「童子」と「後の日の童子」の二編のみである。そして、このうちの一つ「後の日の童子」と、「冬近く」「童話」の三編が〈亡児〉に関わる作品である。いずれも秀作であり、犀星の特色のみられる作品であるが、この〈亡児〉ものは後日の問題として残し、ここではこれらの作品のモチーフを示す有名な詩を紹介し、ごく簡単に触れておくにとどめる。それは、『忘春詩集』所収の「童子」である。これは小説「童子」が発表されたのと同じ日、大正十一年十月一日に『詩と音楽』に掲載されたものである。

### 童子

やや秋めける夕方どき

わが家の門べに童子ひとりたたずめり。

行厨うらかひをかつぎいたくも疲れ

わが名前ある表札を幾たびか読みつつ

去らんとはせず

その小さき影ちぢまり

わが部屋の畳に沁みきゆることなし。

かくて夜ごとに来り

夜ごとに年とれる童子とはなり

さびしき我が慰めとはなりつつ……

犀星は、亡児の幻影を見、これを様々に描きあげている。子を失った悲しみの中の夫婦を描いた「冬近く」には、「そのとき表の門のそばに、影の縮まった一人の童子が佇んで、剥げ落ちた古い表札を読みあげてゐた。」の一文があり、また、次のようにも書いている。

ふしぎなことは、法十と女とがさうして坐つてゐるとき、法十は、もう一人かれらの間に挟まる小さい童子の姿を心にうかべた。これまで子供といふものを普通の人間のなものに考へてゐたかれには、その死に遭つてから子供といふものは、それ以外にもその親にとつてかなり神聖な生きものに思はれる。わけでもないでしまつてから、かれはその童子といふ言葉からして神聖なものを加へてあるやうだつた。ちやうどそれは影のやうにいつもかれはかれのまはりに、童子の姿を目にした。

「後の日の童子」は、「夕方になると、一人の童子が門の前の、表札の剥げ落ちた文字を読み上げてゐた。植込みを隔てて、そのくろくろした小さい影のある姿が、まだ光を出さぬ電燈の下に、裾すぼがりの悄然とした陰影を曳いてゐた。」の文で始まる。両作とも亡児への忘れ

がたいかなしさを描いた作品であるが、特に後者は、幻想と現実をな  
いませにして、詩「童子」のモチーフをそのまま形象化した絶品であ  
る。「童話」は、姉と母との、死んだ弟との交わりという虚構の中で  
の、さらに詩的な味わいの加わった作品である。

このように、愛児を亡くした深いかなしみを、形あるものとして実  
感し、これを超現実的な手法で執拗に描き続ける、つまり、心の不可  
思議を詩的に追求するありように、犀星文学の一特色をみることで  
きよう。

さて、長男豹太郎の病気に材を取った〈病児〉ものの最後は「或る  
家の花」である。これに触れて〈病児〉ものしめくりとしたい。

『忘春詩集』中の「我が家の花」十三編の中に、総題と同題の一編が  
ある。その詩の最終行には「かくして我が家の花散りにけり」とあ  
り、愛児の死のかなしみを歌った作品である。「或る家の花」は、こ  
の直接の感情を虚構によって沈潜した情緒の中に描いた作品である。

「我が家」から「或る家」への距離、これが「或る家の花」の特色で  
ある。

作品は、父親ではなく母親の目・立場から描かれている。全体は四  
章から成る。第一―三章までは、車夫、鈴木車で生後十か月の病児  
を連れて病院に通う母親滯子の心情が、中心に描かれる。病院の前庭  
には試験用の兎が飼われている。これが目を追って殺されていく。滯  
子は「生きものの生命があまりに簡単に取り扱はれ過ぎるのが、心の  
内で不服」である。また、「あんなに可愛らしい生きものの、何とも

言へない温かい生命がもう無くなつてゐるのかと思ふと、それにつな  
がつて我子のことが考へられてならぬ」いのである。愛児の病状はは  
かばかしくなく、二か月の通院でやめる。会社員の夫は病児を見なが  
ら「あの足が立つてくれれば、おれの身の上にどういふ不幸があつて  
も忍ぶがな」と思う。

第四章は、愛児の死後の滯子の寂しい心境が描かれる。ある日、買  
物に出た滯子は兎を目にし、亡児の思い出につながるそれを飼おうと  
決心する。滯子は「心ではあの病院の庭にゐた白い哀れな生きものが  
動いてゐる有様をゑがき、そして赤児を抱いてゐた自分の姿までハッ  
キリ描」くのである。そんな滯子は、夕方になって、「ふと兎の箱の  
前に、一人の童子が佇んでゐるのを見る」のであつた。その幻覚の離  
れないさま、つまり〈亡児〉もののモチーフとして先に指摘したその  
経験を最後に描いて、作品は終る。

先にあげた小説「童子」も「或る家の花」と同じく、病児および亡  
児に関わる世界を描いているが、前者がより自伝的直接的であるのに  
比して、後者は虚構の中に感情は沈潜しており、直接の死ではなくむ  
しろ死というもの、生命というものに触れようとしている姿がうかが  
える。作中に頻用される語は「生命」「生きもの」「死」「殺される」  
であり、作品は生命と死を主題として、心境の深まりを示している。

生命のいとおしさそして哀れは犀星の詩作時代からのテーマであつ  
た。しかし、その生命は主に小動物のそれであつた。この〈病児〉  
〈亡児〉というつらい体験が、犀星文学におけるそのテーマをより確

かなものにしていくのである。

## 3

志賀直哉は、「杵掛にて―芥川君のこと―」（昭和二年九月一日、『中央公論』）の中で「子供に病氣されると、仕事が出来ない話をする」と、芥川君は自分にはさういふ事はないと云つてゐた」と書いていゝる。これは、直哉が芥川龍之介に二度めに会つたときのことであり、それは、たまたま犀星の長男が亡くなつた翌月、大正十一年七月のことであつた。

この出会いの後、龍之介は二つになる次男多加志の消化不良による入院を経験し、これを材料にした「子供の病氣」（大正十二年八月一日、『局外』）という作品を書く。この事実は「澄江堂日録」の大正十二年六月八日から十一日の部分に記されている。作品の末尾には「多加志はやつと死なずにすんだ。自分は彼の小康を得た時、入院前後の消息を小品にしたいと思つたことがある。――略――自分は原稿を頼まれたのを機会に、とりあへずこの話を書いてみることにした。読者にはむしろ迷惑かも知れない」とあつて、龍之介にはめずらしい私小説であることがわかる。子供に病氣されても仕事が出来たかできなかったかという事実（「子供の病氣」には神経的にまいってしまつて創作できない姿が描かれている）は別にして、龍之介は、現実に材を採つて心情・心境を深く表現することは不得手であつた。最後の一文が

それを端的に示しているといえよう。

志賀直哉が対照的であるのはいうまでもない。先にあげた直哉の「流行感冒」とこの「子供の病氣」を読み比べてみればよくわかる。

「流行感冒」は、「最初の児が死んだので、私達には妙に臆病が浸込んだ。健全に育つのが当然で、死ぬのは例外だといふ前からの考は変らないが、一寸病氣をされても私は直ぐ死にはしまいかといふ不安に襲はれた。」という書き出しで始まり、作品は、「私」の幼い子供である佐枝子を流行感冒にかからせまいとする神経質すぎる注意と、それゆえの周囲に対する暴君ぶりを描く。その暴君ぶりは、特にうそをついた石という女中に示される。石は、流感がはやってゐるのに、夜隠れて芝居を見に行つたのである。「私」は石を許せず、ひまを出そうとするが、妻の頼みで思いとどまる。ついに、家の中に流感が入つてくる。「私」も妻も、もう一人の女中のきみも頼んだ看護婦も、そして左枝子も流感にかかつてしまう。石はかからない。献身的に働く。全員治る。「私」の石に対する感情は、「少し現金過ぎると自分でも気が咎める位」に変わる。内容は、簡単にまとめればこのようなものである。

「流行感冒」には、「私」の現実の中での強烈な生き方、偽りのない心がけれなく描かれている。日常の、みごとに芸術化がなされている。生活人として現実を真剣に生き、そこから創作のエネルギーを汲みとるという直哉のあり方を示している作品といえよう。

ところで、犀星はどうか。鋭い神経と繊細な心で現実をとらえ、そ

の現実から創作のエネルギーを汲みとるといふあり方は、直哉と共通するところである。しかし、それぞれの個性がその現実をどうとらえ、どのように創造するかという点においては、当然特色が発揮される。

すでに「心」の解説部分で記したように、現実には「流行感冒」の場合とほぼ同じような状況にあつて、創作世界で犀星が追求しているのは、もっぱら不可思議なわが心の動きであつた。その心は、不安・恐怖・苦痛・エゴ・自己否定であり、動揺する心、自分では制御しえない屈折した心理であつた。そして、直哉のリアリズムに比して、犀星はその心を超現実的な手法をまじえて象徴的に詩的に描出している。

これが犀星の〈病児〉ものにおける特色であつた。そしてまた、この深刻な心理の発見が、〈病児〉ものにおいてであつたことの重要性についても、すでに指摘した通りである。さらに「或る家の花」で触れたごとく、〈病児・亡児〉ものの創造過程で、以前から詩の世界にもち続けていた〈生命のいとおしさ〉〈哀れ〉を、自己の文学上のテーマとして決定的なものとしたのである。

稿を終えるにあたって、〈病児・亡児〉ものの多くが未刊行作品であることを、あらためて思い起こしておきたい。犀星文学においては、未刊行作品の胎んでいるまだ見えない問題の存在が、十分考えられるのである。

[注]

1 他に重要と思われるものをあげておく。

『遠野集』（昭和四十五年一月二十五日、企画・飯田淳次、製作・三ツ木幹人、非売品）——俳句集

『蒼白き巢窟』（昭和五十二年五月十五日、冬樹社）——小説

『室生犀星句集 魚眠洞全句』（昭和五十二年十一月三十日、北国出版社）

『美しい歴史』（昭和五十五年三月二十三日、冬至書房新社）——小説集

2・4 『室生犀星未刊行作品集』第一卷（昭和六十一年十二月十五日、三

弥井書店）における奥野健男の「解説」による。

3 大正十二年一月一日発行の『詩と音楽』に發表した隨筆「元朝」（『高麗の花』所収）の中で、この隣の子供の思い出を書き、「その子は雪のつけたころに、家の人と一しよに亡くなつたとも聞いてゐる。——毎年正月になると私はその隣の子をゆくりなく私は思ひ出すのである。」と結んでいる。

5 「小景異情」の、『朱欒』初出（大正二年五月一日）、『感情』再出（大正五年七月一日）、『抒情小曲集』収録（大正七年九月十日、感情詩社）の際の異同については、すでに先学によって比較整理されている。ここでは、特に詩集収録の際、「その六」に新たに「あんずよ／花着け」で始まる、明るい春の到来、激しい願望の詩をおいた点をいう。

6 「立春歌」に関しては、『室生犀星の短歌——資料——』（昭和六十年十二月二十五日、城西大学女子短期大学部文学科）で比較整理を試みていく。ご参照いただきたい。